

## あぶらむの森

岐阜県飛騨高山の山里に、「あぶらむの里」という小さなコミュニティがあります。大郷博<sup>おおごうひろし</sup>という人物が拓いた「疲れた人が一度立ち止まり、自分を見つめ直すための空間」です。小ナラの林に囲まれた広大な敷地には、静かに小川が流れ季節ごとに土地の花々が咲き乱れます。敷地には旅人を癒す「あぶらむの宿」の他12棟の木造りの建物が点在するのですが、一番古い「諸魂庵<sup>しよこんあん</sup>」はなんと江戸期宝永元年（1704年）の住居で、300年以上経過した今でも全く衰えをみせない見事な建造物です。樹齢数百年は優に超える巨木と白壁が作り出す諸魂庵の空間に立った時、そこには普段とは全く違う時の流れを感じました。その静寂は、時間を無くしたような不思議な感覚を僕に与えてくれたのです。そこにたたずむだけで瞑想をしているような……静寂の中で全身が透明にな

るような不思議な感覚です。わずか数分間だったと思いますが、とても長い時間そこに居たような気がしました。

とあるご縁を頂いてあぶらむの里に大郷博先生を訪ねたのは、今まさに満開という桜が咲き誇る春でした。飛騨古川駅のホームに降り立った時、白い髭をたくわえ真つ黒に日焼けした彫りの深い顔が目に入りました。初対面でしたが直ぐに分かりました。大郷先生です。「濁川です」と言って握手した時、その「手」に圧倒されました。ずっしりと僕の手を掴んだその手は分厚くごつごつと節くれ立って、そのくせとても温かかったです。その瞬間、「負けた」と思いました。なぜか、負けたと思えました。大郷先生は夢の実現の為に飛騨の山里の一面を買い取り、そこを自ら重機で切り拓きました。そして、10棟以上ある建物のほとんどを自らの手と身体だけで造り上げたのです。昔好きだった倉本聰のテレビドラマ「北の国から」の世界を地で行くような、そんな先生です。そんな人の「手」に勝てるわけがありません。しかしその夢は、それまでの安定していた職を辞し、退路を断って挑むほどに大切だったのでしょうか。「あぶらむの里」は

一つの賭けでした。もし失敗したら、家族を抱えてどうするのでしょうか。夢が大きければ大きいほど、最初の一步はなかなか踏み出せないものです。「転んだら、また立ち上がればいいんだ！」失敗を恐れるよりも、まず自分の夢に飛び込んでみる。失敗したら、そこからまた立ち上がればいいんだ。これぞ、大郷先生の真骨頂です。僕の大好きな星野道夫の言葉、「大切なことは出発することだった」、この言葉を地で行くような大郷先生の行動でした。

僕と大郷先生を繋いでくれたのは、今は亡き写真家の星野道夫です。僕は星野道夫を敬愛し自らの研究対象にもしておりました。それを知っている飛騨高山在住の知人が、大郷博という人の書いた『あぶらむへの道―その旅の途上で出会った人々―』という本を送ってくれたのです。添えられた手紙には、星野道夫との交流を書いた一節があるよ、と記されていました。それが大郷先生とのご縁の始まりでした。そして読み進めると、なんと大郷先生は僕が30年以上も在職した立教大学に、8年間チャプレン（教会の牧師）として奉職されていたのです。僕が立教大学に勤務する2年前に退職していましたので、

大学時代に関わることはありませんでした。立教大学を去った大郷先生は、ご自身の夢「あぶらむの里」を始められたのです。

そんな大郷先生の人生を支えたのは、アメリカのホテル王と呼ばれたスタットナーの「人生は奉仕なり」という言葉です。この言葉をバックボーンにした大郷先生の生き様や価値観は、僕ら現代人に多くの示唆を与えてくれます。そのいくつかを紹介したいと思います。

## 転んだら立ち上がればいいんだ

ハンセン病はかつて「らい病」と呼ばれ、結核と同様日本では過去の病気になりつつあります。しかしその患者には、筆舌に尽くし難い差別を受けてきた苦難の歴史があります。親や兄弟姉妹と一緒に暮らすことができない。実名を名乗ることができない。結婚しても子供を生むことが許されない。一生療養所から出ることができない。死んでも

故郷の墓に埋葬してもらえない。こんな差別が、当然のごとくまかり通っていたのです。

らい菌の感染力は本来とても弱く、普通の免疫力さえあれば他人にうつることはほとんどありません。しかし病状が進むと手足が変形したり顔がただれたりすることがあり、時に「異形」とも見える容姿になるため、信じられないような差別の対象とされてきたのです。

若き日の大郷先生は、キリスト教の牧師として「愛楽園」という沖縄にある療養所に通いハンセン病者に寄り添ってこられました。そこは、時に立教大学の学生を伴っての課外活動の場でもあり、学生にとって大きな学びの場でもありました。そんな学びの場を与えられた大郷先生の門下生は、なんと幸せだったことか。その愛楽園で大郷先生は、山城タケさんという一人の女性と出会います。そのタケさんから、大郷先生は人生の道標となる大切な言葉を頂いたのです。タケさんのかつての暮らしぶりは、そのまま当時のハンセン病者に対する差別と偏見を物語ります。少し長いですが、タケさんのことを記した大郷先生の文章を以下に引用します。

タケさんが発病を知ったのは10歳の頃、そのため学校は小学校5年生までしか行けなかった。家に閉じこもり悶々とする日々、タケさんの病気が理由で、弟や妹はいじめられ、学校から泣いて帰ることが度々あったという。また、家にいると、那覇の町や内地、たとえば大阪や東京などへ出稼ぎに行つた友だちから、それぞれの家庭に送金があつた話を聞かされた。その話を聞いた自分に自分が恨めしくて、惨めな思いをしたそうだ。そして、自分がこのような病気になるなければ、両親に少しは楽をしてもらうことができるのにと、涙を流して親不孝を詫びたという。

あまりもの世間の仕打ちに、自分さえいなければと思い、家を出ることにした。集落から3 kmほど離れた海岸に小屋を建て、畑を耕し海に潜つて漁をして、18歳から28歳までの、人生でいちばん華やいだ年代をタケさんは一人で生活した。「夕暮れ時がいちばん淋しかった」とタケさんは言った。その頃、お月様の中に神様がいると漠然と思ひ、夜になるといつも空を仰いで、「神様、なぜ私を、私一人をこん

な病気にしたのですか。私は何も悪いことをしていないのに、どうして私一人を、人に嫌われ家族と一緒に暮らせない病気にしたのですか。ねえ、神様、私を助けてください」と言つて手を合わせ、そして白い砂浜に座つて泣いたという。

そんなある日、父危篤の連絡が入つた。近所の人の目が怖くて家に行くことはできなかつた。そして父の死。家人が訪ねてきて、これだけは務めだからきちつとお別れしなさいと、きつく申していったという。その時のようすを語るタケさんの表情を私は忘れることができない。「人が怖くて、人と顔を合わせる事が怖くて。父が亡くなった日その夜を待つて、私は家を出てから初めて家に向かつた。人に会うのが怖かつたから、墓場から墓場へと身を隠しながら家に近づいた。途中、どうしても橋を渡らなければならなかつたが、橋の上で人に会うのが怖く、着物を頭にして川を渡つた。家にはあがることなく、遠くからお父さんに我が身の不幸をお詫びし、お別れしました」——これがタケさんの青春だったのです。

そんなタケさんが、面談の最後に私に言つた。「大郷さん、長い人生の中、たく

さんの山坂を越えなければなりませんヨ。時には転ぶ時もありますヨ。でも、転んだら起き上がりなさいね」。

大郷博『CAMINO de ABRAM あぶらむへの道―その旅の途上で出会った人々―』83頁

この「転んだら起き上がりなさいね」という言葉は、その後大郷先生の心の中を激しく駆け巡ることになります。そして、これまでの大郷先生を打ち壊してしまったそうです。それまでの先生は、人生において転ぶことを恐れ、「転ばぬ先の杖」を太く強くするように生きてこられた。「人生において、転ぶことを恐れていた自分があった」、と書いています。しかし、それは極当たり前のことでしょう。誰だって転びたくはありません。ましてや、人生という旅路においては。しかしこの言葉は、大郷先生の生き方を根本から変えました。大郷先生は、「人生とは転ぶものだ、そして転んだら立ち上がればいいんだ」、という考えに立ったのでした。以降、この言葉が大郷先生を支え、ここまで導いてきました。先が全く見えない「あぶらむの里」へ飛び込んで行けたのも、この言葉



があつたからです。

転ぶことが良いことだとは決して思いません。できれば転びたくはないものです。しかし、人生、小さな失敗は必ずあります。そのたびに、僕のような小さな人間はくよくよ考えます。でも、そんな小さな「転び」から人生を変えるような大きな「転び」も含め、転んだら立ち上がれば良いのです。山城タケさん、そして大郷先生は、それを教えてくれました。

ある時大郷先生は、タケさんが一人で暮らした海岸ペリを訪れたそうです。そこは砂浜がほんの少しあるだけで、大部分は石や岩のゴロゴロした自然条件の厳しい場所でした。タケさんは、青春と呼ばれ人生でもっとも華やぐべき時期を、誰に会うこともなくただ一人、わが身の不幸を月に問いながらこの地で暮らしてきたのです。そのことを想い、先生は泣けて泣けて仕方なかったそうです。タケさんが月に向かってひざまずき祈る姿を思い浮かべた時、僕も涙が止まりませんでした。

## もうひとつの時間

圧倒的な自然体験は、時に僕たちを根底から変えてしまうような力を秘めているのかもしれません。

先にも記しましたが、僕と大郷先生を繋いでくれたのは写真家の星野道夫でした。星野道夫の名著『旅をする木』（文藝春秋）の中に、僕の大好きな「もうひとつの時間」と題する一節があります。ここでは、我々が都会で生活しているその時にアラスカの自然や動物たちにも同じ時間が流れている、その当たり前の事実が瑞々しい文章で綴られています。その中にこんなシーンがあります。その時、星野道夫はオーロラの撮影のため厳冬期のアラスカの氷河に来ていました。

ここは宇宙と対話ができる不思議な空間だった。四〇〇〇〜六〇〇〇メートルの高山に囲まれた氷河の上で過ごす夜。暗黒の空を生き物のように舞う冷たい炎。そ

れは、壮大な自然の劇場で、宇宙のドラマをたった一人の観客として見るような体験だった。ぼくはこの時間を誰かと共有したかった。

星野道夫『旅をする木』「ルース氷河」 114頁

なんという情景でしょう。“宇宙と対話ができる空間”。そこにはオーロラが舞って、星々が静かに降りそそぐ。こんなシーンに出くわした時、僕たちはその意味を本当に理解することはできず、ただ何かにひれ伏すしかないのかもしれないかもしれません。そして、こんなシーンに接したなら、自分の中で、何かが確実に変わる“ような気がします。それは多分、星野道夫が友人と交わしたこんな会話のようなことなのでしょう。

ある夜、友人とこんな話をしたことがある。私たちはアラスカの氷河の上で野営をしていて、空は降るような星空だった。オーロラを待っていたのだが、その気配はなく、雪の上に座って満天の星を眺めていた。月も消え、暗黒の世界に信じられ

ぬ数の星がきらめいていた。時おり、その中を流れ星が長い線を引きながら落ちていった。

「これだけの星が毎晩東京で見られたらすごいだろうなあ……夜遅く、仕事に疲れた会社帰り、ふと見上げると、手が届きそうなところに宇宙がある。一日の終わりに、どんな奴だって、何かを考えるだろうな」

「いつか、ある人にこんなことを聞かれたことがあるんだ。たとえば、こんな星空や泣けてくるような夕陽を一人で見ていたとするだろ。もし愛する人がいたら、その美しさやその時の気持ちをごんごんに伝えるかって？」

「写真を撮るか、もし絵がうまかったらキャンバスに描いて見せるか、いややっぱり言葉で伝えたらいいのかな」

「その人はこう言ったんだ。自分が変わってゆくことだって……その夕陽を見て、感動して、自分が変わってゆくことだと思うって」

星野道夫『旅をする木』「もうひとつの時間」 119頁

感動して自分が「変わる」とは、つまり自分が「成長する」という意味です。自身の成長する姿を見せて感動を伝える。凄いなあ、なんとという気の長い発想だろう。星野道夫と会話を交わす素敵な友人の姿を思い浮かべながら、そんなふうには僕は思いません。そして、ここに書かれていた「その人」こそ、なんと大郷先生だったのです。確かに大郷先生はご著書の中で、ご自身の体験として同じ意味のことを書かれていました。しかし僕は、まさか星野道夫の文章の中に出てくる「その人」が大郷先生ご自身だとは知る由もなく、「星野道夫が先生と同じ事を書いています」と、無邪気にも誇らしげに先生に教えてあげたのです。それがご本



「もうひとつの時間」の大郷博先生と。「星野道夫の木」の前で。

人だという事実を知らされた時、僕は冗談抜きにひっくり返りそうなほどビックリしました。そして同時に、とつても嬉しかったのです。頭の中で密かに憧れていた「その人」が目の前にいるのですから。と同時に、星野道夫その人をとつても身近に感じる事ができて……本当に嬉しかったのです。

変わりたくても、なかなか変わることができない自分がいます。成長したいと願いつつも、なかなか成長できない自分がいます。「圧倒的な自然体験」というもう一つの時間は、もしかしたらそんな願いを叶えてくれるのかもしれない。

この「もうひとつの時間」と題する一節の中には、こんなエピソードも書かれています。それは星野道夫の友人の女性がアラスカを旅して、巨大なザトウクジラが海を割って跳びあがる、という圧倒的なシーンを目の当たりにし絶句する物語です。帰国後彼女は星野道夫に宛てた手紙の中で、次のようにその感動体験を記すのでした。

東京での仕事は忙しかったけれど、本当に行って良かった。何が良かったかって？

それはね、私が東京であわただしく働いている時、その同じ瞬間、もしかするとアラスカの海でクジラが飛び上がったっているかもしれない、それを知ったこと……（後略）

星野道夫『旅をする木』「もうひとつの時間」 123頁

こう語る彼女のエピソードを紹介しながら、星野道夫は次のように書いています。

ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆつたりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは、天と地の差ほど大きい。

星野道夫『旅をする木』「もうひとつの時間」 123頁

目の前の慌しい生活が自分を飲み込みそうになった時、実はそれが世界の全てではな

く、ちょっと心の目を凝らせばアラスカに野生動物たちが瑞々しく息づいている。そのシーンを心に描くことで、心の中に「もうひとつの時間」を持つことができると星野は言うのです。「もうひとつの時間」は、ふーっと大きく息をして肩の力を抜くような安心感を私たちに与えてくれます。それは同時に、僕たちを強くしてくれることに他なりません。なぜならば、近視眼的に一つのことに関われて身動きできなくなっている自分を解放してくれる可能性を持つからです。見方を変えれば、それは心の中で自分の存在を空から俯瞰し、相対化するような視点を持つということなのです。自殺を考えるような人には、是非この視点を持つて欲しい。もちろん、僕たちの誰もがアラスカのような壮大な自然を知っているわけではありません。しかし誰もが持っている小さな自然体験へ思いを馳せることでも、「もうひとつの時間」を持つことは可能だと思えます。大郷先生が言うように、転んだらこの「もうひとつの時間」に想いを馳せ、気持ちを切り替えて立ち上がれば良いのです。

自然体験による感動はゆっくりと醸成し、「もうひとつの時間」という余裕を私たち



にもたらし、仮にそれが日常で意識できなくても潜在意識に保存され、必要な時に呼び起こされる。人間には、ひれ伏すような圧倒的な自然に包まれ言葉を失う時間が必要なのかも知れません。

## 心が追いつくまで待っています

大郷先生の「あぶらむの里」には、とても大切なものがあります。現代人が見失ってしまった大切なものがあります。それを一言で言えば、気の長い時間感覚です。つまりは性急に結果を求めず、「じっくり待つ」という姿勢です。このじっくり待つ、という視点こそ現代人が失った最も大切なもので、現代社会に横たわる多くの問題の遠因はここに在るように僕には思えます。僕たち現代人は自然のサイクルという悠久の時の流れに身を任せることができず、先へ先へと事を急いだ結果、環境問題をはじめとする多くの問題を抱え込んだのではないのでしょうか。

あぶらむの里を運営する大郷先生のポリシーを要約すると、概ね以下の3つに集約することができます。

① 人生という旅の途中で迷ったら立ち止まること、積極的立ち止まりを提案し、その場を提供すること。

② 買うことはあっても創ることが少なくなった時代の中で、改めてものづくりを大切に実践すること。

③ 人と自然、そして全ての背後にある大きな力、この3つの力の中でこそ人は育つという信念の下、人づくりを実践すること。

これらの根底にあるのは、いづれも「じっくり待つ」という姿勢です。先へ先へと追いつてられ立ち止まるのが許されない現代社会にあって、大郷先生は一度立ち止まることを提案します。人生の旅路で疲れ傷ついた人々に、立ち止まることを勧めます。ものを創るといふのは、時間のかかる作業です。そして自然の中で人を育てるといふ思想は、人智を超えた大いなる力に身を任せて待つ、という考えに通じています。全ては「待

つ”ことが根底にあるのです。

事実、大郷先生の日常には時代錯誤のような気の長いところがあります。このインターネットの時代にあつて、SNSを一切なさらないのです。メールもラインも使えません。ですから細かい連絡は結構大変で、電話か手紙になります。手紙もワープロ書きではなく、全て手書きです。実を言うと、細かいスケジュールなどをお伝えする時など、僕はそこに不便を感じました。でも考えてみれば、昭和や平成の初期ではそんな生活が当たり前で、誰も特に不自由や不便など感じなかったわけです。如何に僕たちの生活が加速されてきたかが分かります。

星野道夫の『旅をする木』の中に、「ガラパゴスから」と題する一節があります。そこには、僕たち現代人とは別の時間感覚で生きている山人の話が出てきます。こんなお話です。

以前、こんな話を読んだことを思い出しました。たしかアンデス山脈へ考古学の

発掘調査に出かけた探検隊の話です。大きなキャラバンを組んで南アメリカの山岳地帯を旅していると、ある日、荷物を担いでいたシエルバの人びとがストライキを起こします。どうしてもその場所から動こうとしないのです。困り果てた調査隊は、給料を上げるから早く出発してくれとシエルバに頼みました。日当を上げろという要求だと思ったのです。が、それでも彼らは耳を貸さず、まったく動こうとしません。現地の言葉を話せる隊員が、一体どうしたのかとシエルバの代表にたずねると、彼はこう言ったということです。

“私たちはここまで速く歩き過ぎてしまい、心を置き去りにして来てしまった。心がこの場所に追いつくまで、私たちはしばらくここで待っているのです”

星野道夫『旅をする木』「ガラパゴスから」41頁

心を置き去りにして、先を急ぐ僕たち現代人。加速される時間の中で、自らの心を見失い、他者の失敗や躓きを許さない現代人。星野道夫の文章や大郷先生の生活は、そん

な自分の姿に、はっと気付かせてくれます。

不登校の若者や家庭裁判所観察下にある少年の更生指導に、時間をかけ、じっくり向き合う大郷先生。必要な住居や建物は時間をかけ自分で作る大郷先生。そこには、「待つ」という思想が流れています。「競争」の意識から「共生」の意識へと変換を図るためには、時に、「静けさの中でじっくり待つ」という時間が必要なかもしれません。

そんな大郷先生が大変な時、いつもそこには神の助けがありました。広大なあぶらむの地を買い取る時、先生に潤沢な資金があったわけではありません。ましてや、そこに住居を作る資金など皆無です。しかし先生は言います。「必要な時には、いつも天の助けがあった。必要なお金は空から降ってきた」と。私心の無い大郷先生の夢の実現に友人たちが奔走し、数千万円の資金があつという間に集まったそうです。「我欲のためではなく、自身の使命に従って全身全霊で事に当たる時、必要ならば神の助けは与えられる」これは僕が敬愛する映画監督龍村仁の言葉です。正に、この通りのことが大郷先生に起きたのでした。

大郷先生がこしらえた建物には、いくつかの住居のほか夏のビアガーデンやツリーハウス、道具小屋などたくさんあるのですが、現在に至ってもなお建設途中の建物がありました。それは木造りの大きな建物で、そこを子供たちの自然教育の拠点にしたいそうです。いくつになっても先生の夢は尽きません。そんな先生の建造物の中で、最高傑作は何と言っても里の真ん中に鎮座する五右衛門風呂でしょう。夕暮れ時、この五右衛門風呂にじっくり浸かって静かに目を閉じれば、それだけで時間がゆっくり流れる感覚を味わうことができます。そして、風呂を出れば空に満天の星々が歌っています。さて、残るは後継者問題。既に70歳を超えた大郷先生にとって、「あぶらむの里」の維持はそろそろ体力的に限界が近づいているのではないのでしょうか。現代という砂漠にひっそりと佇むオアシスのようなこの場所を、体力と夢をもった若い人が継いでくれること切に願います。